

「存在論的言語論試論」

—— マルティネとメルロ・ポンティ ——

菊 川 忠 夫

“Introduction to An Ontological Approach on Linguistics”

Tadao KIKUKAWA

要 旨

1. 記号論的言語論は、なお、その基礎論の箇所に難点があるとみられる。
2. 基礎論を重視する言語学研究としては、構造主義的アプローチと現象学的アプローチとが対立し、現代の二大潮流をなしている。
3. 構造主義を代表する A・マルティネと、現象学を代表する M・メルロ・ポンティとの間には、晩年になって実際に若干の相互批判が展開された。しかしそれらの批判の大部分は、視座と射程の相異に基づくものである。
4. 「遺稿」を中心として、メルロ・ポンティの最晩年の思想の焦点を探り、始源の論理としての《存在論的言語論》の方向性と輪郭とを検討する。

は じ め に

デカルトに始まる近世哲学は、大局的には、人間を機械論的立場で捉えるという基調を持っていた。そして主客二元論とか物心二元論とかいうその特色も、結局は、機械論的モデルに基づくところに由来するものとみられる。だが今や、それへの反省と吟味が、さかに行われるようになってきている。

ところで、現代の言語学の趨勢は、どのようなものであろうか？ 昨今、とみに科学的・構造主義的言語論、とくに情報理論的な言語論が大きく発展し、それを無視しては言語学を語れない程の勢いを示している。だが、人間の言語は、そのような情報伝達手段に過ぎないものであろうか？ 言語は余りにも人間生活に密着し過ぎているため、部分的特質のみがクローズ・アップされて、その全体的本質は却って見究め難い、ということなのではなかろうか？

現在流行しているいわゆるコミュニケーション論やマスコミ論では、言葉を〈通信の手段〉と考えたり、〈思考のための道具〉とする考え方が支配的である。そこ

には、何らかの通信内容なり思想なりが先にあって、それを言い表わして伝えるのが言葉である、という大前提が据えられている。だが、果してそうなのか？ ハイデガーのように、「言葉は存在の住み家である」とまでは言わないにしても、言葉は人間関係そのものであり、人間に住みつき、人間の思考を左右するという側面を、誰も無視するわけにはいかないように思う。そして小論は、言語——思考——人間——世界の同時成立の可能性を模索するにある。

1. 記号論的言語観

今日流行している記号論的言語学は、言うまでもなく、機能主義に依拠している。そしてそれは、抽象的、機械的な要素主義を、若干修正して成立しているように思われる。その理論の中核となるものを簡略化するなら、先ず「発信者」と「受信者」がいて、その間に「メッセージ」があり、メッセージを担っているものが「記号」であるとする。もちろん、この活動の中間に「通信」があり、通信装置と通信路によって「記号」は運ばれるとする。ただ、最近の情報理論は、これ程単純な機械論になっているわけではなく、かなり複雑化して、〈人間の顔〉をも具えるようになってきているという。つまり、ここでコミュニケーションと言っても、必

ずしも $A \rightarrow B$ という一方方向的なものであるとは限らず、 $A \rightleftharpoons B$ というフィードバックがかかってくる場合も含めているという。つまり、一方の側に「送り手」を、他方の側に「受け手」を考えても、そこに役割交換が生ずる場合を、完全に無視するわけではない。また「メッセージ」を送るといっても、ある物が別の物を運んで行くというような機械論ではなく、あくまで「情報」を送るのである。情報の内容(メッセージ)は、記号で送る以外にない。ただ記号で送っても、そのままでは情報にならない。そこには「コード」が必要となる。このコードとは何かと言うと、約束された一つのコンテキスト——符号全体のシステムである。そこで、記号によってメッセージを送ること自体は情報ではないが、その記号を担っているコードによって、それは或る特定の意味を持ち、ここに情報が成立する。このように、情報とは、様々なメッセージの中から、受け手が何らかのフィルターによって有意味なものをキャッチするところのものである、ということになる。ここには、無秩序の中から、コードを通して意味を成立させ、秩序を発生させるというネグントロピーを含んでいる。そこでそれは、先程も触れたように、〈人間の顔〉をも具えている、と表現できるわけだ。

だがそれにも拘らず、記号論的言語観の基礎には、問題がないわけではない。第一に、言語の機能主義的な面だけが特に取り出され(道具としての言語)、その他の諸層は捨象されている。第二に、抽象的な機械論的モデルを人間主義的に修正するという方向は認められるにせよ、基本的には、知的なコミュニケーションに傾斜している[感情的・情緒的……コミュニケーションは取り入れにくい]。

2. コミュニケーションの原義

いま一步譲って、言語とはコミュニケーションの手段であることを、承認してみよう。この場合、先ず、われわれは、何故コミュニケーションとかコミュニケーションという欧米語を使用するのであろうか? 恐らく、日本語の「伝達」という狭い意味には納り切らない意味をそれは具えていることに、気付いているからであろう。つまり、communication = 「伝達」なのではない。いまリトレの辞書(Dictionnaire de la langue française, Littré, 1965)で確認してみると、コミュニケーションの語源は、ラテン語の communicare であり、この動詞が次第に communier と communiquer という二つの動詞として使い分けられるようになって、

後者から communication という語が成立したとある。つまり、本来の意味は、「コミュニケーション(communion 信仰共同体)の中で共生する」とか「全体的な共同関係を成立させ、またそれに参加する」ということであった。日本語のいわゆる「伝達」という意味は、恐らく、近世になって派生的に生じたものに違いない。

現在、日本語で「伝達」というと、「(精神的)交通」や「交流」から程遠くなり、いわば物品を他人に届ける一方交通的な行為を考え勝ちであり、またそのようなモデルを描きたくなるが、少なくとも、コミュニケーションの原義からは、かなり大幅にずれている。繰り返すなら、コミュニケーションは、もともと、「互いに共同の関係に入る」ということ、換言するなら「コミュニケーションを成立させる実践の原理運動」を意味していたわけだ。そこで、ここからヒントを得て、一つの遠大な仮説を立ててみよう——言葉を語るということは、根源的には、相互関係に入ることであり、共生の関係に参加することである。それは、言語的世界の成立、ひいては、人間空間的・構造的世界の成立、つまり人間の成立そのものに外ならない。

ところで、人間の言語の起源については、J・G・ヘルダーの『言語起源論』以前から様々に論じられてきたが、J・J・ルソー以来、「野生の叫び声」に始まるとする説が、次第に有力となった。その場合、「叫び声」というと、強い痛みとかいった衝動的な自己表現、あるいは獲物や敵の存在を知らせるための類人猿的な叫びなどが、よく例に引かれる。近代的思考の枠組みでは、大部分の叫びは、内的な衝動の表現と見なされてしまう。だがその根底には、その叫びによって集団相互帰属の関係を醸生させ、人間の社会と世界とを確認するという本質的な核が潜んでいるのではなからうか? つまり、言語の根源相の考察に当り、機能的言語観の底に、存在論的言語観とも言うべきものを、据え直すべきではなからうか? 機能的言語観のみでは、ある民族にとって或る言語が、いちおう自己完結的であるということは説明できても、そのような特殊な言語が、何故、人類にとっての普遍的な構造に通じているかを、説明できない。例えば、異なる言語間の翻訳可能性の問題を処理し切れない(言語神授説 = 「言語を神的な力の発現と見なす説」をとるなら別であろう)。

これを要するに、世界が先にあって、それを人間は言葉で表わす、というのではなく、むしろ(極論するなら)言葉が先にあって、それによって世界が生ずると

いう方向への傾斜が、必要なのではなからうか？ より厳密に言えば、人間と言語と世界とは「共生する」(共に生じ共に発展する)のであって、言語化されることによって人間と世界が生じ、人間と世界が生じることによって言語が確立する、と考えることが必要なのではなからうか？

3. 人間の言語

E・カッシーラーの『象徴形式の哲学』は、人間の言語機能の本質をシンボル機能とし、高度な創造的活動の相をそこに見てとっている。だがカッシーラーの指摘をまっまでもなく、人間の言語は素朴な機械論的構成になじまないことは、容易に理解できる。それは、たんなる1対1の対応関係を軸とする「信号」(signal)ではない。そのどれをとってみても、「信号の信号」ということ——つまり、現にどこかに存在しているわけではないが、一つの観念としてあるようなものを表わす、というところにその特色がある。そしてこのことを一般に象徴形式と言って信号形式から区別し、〈人間の言語はシグナル的ではなくシンボリックである〉と言われる。ところで、このシンボルなるものの特徴は何であろうか？ 前掲の辞書(Littre)によると、フランス語のサンボル(synbole)は、これまた、日本語の「象徴」と完全に同義ではない。この語の語源をたどると、symbiose……などという語と同根であり、「共生」とか「結合」(きわめて密接な結合関係)の意味を具えていたし、今日でもその何がしかは保存しているという。現に、「記号一般」とか、宗派の(特にカトリックの)「信経」や「信条」をサンボルと称している。

このように複雑な意味を担うサンボルとしての言語は、当然のことながら、無限の組み合わせを使うことが出来る。またそのことによって様々なことを区分したり表現したりすることが可能であるから、人間は多彩な領域の文化を創り出し、かつ、その文化的遺産を保存したり発展させることが出来た。それは、分節展開が可能な言語体であり、今日的表現を用いるなら、情報の生産と蓄積とがともに可能であるような装置であった、と言えるであろう。

4. マルティネの基本的な立場

今世紀最大の言語学者の一人であるA・マルティネは、人間の言葉の最大の特色を articulation (分節・展開) であるとし、その分節の仕方を「二重分節」(la théorie de la double articulation) として理論化した。

人間は、言語による経験の記号化を行うのであるが、その場合、それは次の二つの要請を満たすものでなければならぬ。

① 人間の記憶力は、人によりかなりの差があるというものの、一般には、極めて限定されたものである。従って言語は、限定された記憶力という条件の下で、最大限に経済的であり、最も使い易いものでなければならない。

② 言語は、人間の極めて多様な経験を表現し、伝達できる最大限の能力を持つものでなければならない。

さて、右の二つの要請は、真向うから対立するものである。そしてこの対立する要請は、実際に、どのように応えられているのであろうか。もし人間の言語が、一回限りで1対1に対応するような言述^{ディスタール}を一つの未分化な形態の集塊でまかなっていこうとすれば、無限に異なった未分化の形態の集塊である言述を次々と準備せねばならず、それは限られた記憶力しか持たない人間一般にとって、初めから使用できない信号体系となってしまうだろう。この最悪の事態を避けるためには、次の二つのことが不可欠となる。

① 出来る限り多くの表意要素(monèmes 記号素)を用意しておき、それらの多様な組み合わせによって、無限に複雑な言述をつくり出せるようにする。[だが、これらの記号素を、もしも一つの未分化な音声の集塊でまかなっていこうとすれば、人間の平均的な発音能力や認知能力の限界にぶち当たる]

② 記号素の能記^{シニフィアン}(意味表示するもの、記号外形)を、より小さな調音要素(phonèmes 音素)の順列と組み合わせによってまかなっていくようにする。[人間の言葉は、その発声からして、母音と子音との組み合わせであるが、その母音や子音の切り方や数は、民族によって非常に大きな差があり、かつその組み合わせは、無限に近い多様性を秘めている]

マルティネは、前述の①に当たる記号素への分節(分析)を第一次分節と呼び、②に当たる記号素の能記の音素への分節(分析)を第二次分節と呼んだ。そして、これら両者を合わせた言語の二重分節の総体は、言語が無限の表現・伝達能力を確保しようとする限り、不可避な出来事(構造)であった、と考える。[科学としての言語学の分野にこれを割り当てるなら、①は統辞法や文法の知識を要求し、②は音(韻)論の知識を必要とする]

以上のようなマルティネの二重分節の理論は、人間

の言語の豊饒性を浮き彫りにし、それと他の動物の伝達（本能的信号）とを明確に区分するものであった。

（マルティネ『一般言語学要理』参照）

5. メルロ・ポンティの基本的な立場

M・メルロ・ポンティは、言語のもつ根源的・初次的な相に、ひたすら注目し続けたユニークな思想家である。初期の『知覚の現象学』も、ある意味では彼の言語論の書であり、最後の遺稿『見えるものと見えないもの』にも、言語論の新しい方向が模索されている。その間、彼はソシュールに始まる構造主義言語学の諸成果を消化しつつ、『シーニュ』所収の若干の論文をものにした。そして晩年には、前章で紹介したマルティネの業績にも注目している。

初めに、メルロ・ポンティが強力に排除しようとした二つの言語観について、考察してみよう。

① 経験主義の言語観＝この立場は、言語活動を、機械的な生理過程として扱う。例えば言語活動とは、人間の脳のうちに痕跡としてストックされた語詞映像が、外的刺激によって再生されることだ、と考える。

② 主知主義の言語観＝この立場は、言語活動を、内的思考作用の単なる外皮として扱う。例えば、言語活動の背後に、もっと一般的な知的活動を想定できる、とする。

さて、これら二つの言語観は、現在もなお発展し続けている二大潮流なのであるが、メルロ・ポンティの眼からすると、何故、間違いなのであろうか？ たしかに、直観的にも、人間の言語の根源相は、①でも②でも納まり切らないように感じるのであるが、メルロ・ポンティの偉大さは、彼が現代科学の最先端に立って、実証的に①と②に反論したことにある。その主要な根拠は、第一に失語症の研究であり、第二に幼児の言語獲得についての研究であった。このうちメルロ・ポンティが特に力を入れたのは第一の問題であったから、この点に焦点をしばってみよう。経験主義の立場からは、失語症とは、大脳皮質の特定部分に損傷やら欠陥が生じたのだ、という説明になる。この説明は甚だもっともらしいが、実は大脳皮質の損傷位置と失語症の段階とは1対1に対応せず、また必ずしも比例しない、ということが臨床的に明らかになってきた。つまり、経験主義の立場では、失語症は十分に説明し切れないということである。

では、主知主義の言語観ではどうかであろうか。この立場は、言語能力の背後に、いっそう一般的な知的能

力を想定する。例えば、色名健忘症の患者は、色見本を或る原理に従って分けてゆく分類の能力を失っているからだ、とみる。つまり、言語の障害は、その背後の知的能力の障害なのである。[この立場はかなり正しいのであるが] 実際は、その知的能力のすべてが同じように喪失したり、弱化するわけではない。色の分類能力の喪失といっても、実は複雑な様相を呈しており、強いて言えば、人間的な関心が低下した付近で障害が最も強く露呈する。つまり、障害は、その人間の全人的な意味をもって、構造的に露呈するのであって、主知主義の立場の説明では、納まり切らない、ということになる。

これを要するに、言語活動を機械的な生理過程として扱う経験主義も、また言語活動を内的思考作用の単なる外皮として扱う主知主義も、ともに言語の十分な説明を与えていない。前者は言語を神経機構の自動運動に還元し、後者は言語を内的な思考作用に還元しようとするのだが、その還元は無理であり、言語の本質は、その間に失われてしまう。メルロ・ポンティの言葉を借りるなら、経験主義においては「語る主体もいなければ、意味をもった言葉も存在しない」し、主知主義においては「思惟する主体はいても語る主体はおらず、意味があるのも思惟であって言葉ではない」ことになる。

こうしてメルロ・ポンティは、言葉そのものに住みついている「言語の実存の意味」を模索してゆく。「語る」とは、何よりも主体が世界の中でとる「位置のとり方」であり、世界を目指しての「経験の或る構造化」、「実存の転調」に外ならない。従って言語は、すべての身体的所作と同様に、そこに内在する情動的・所作的な意味を有する。そしてそのことによって初めて、人間に住み慣れた世界が、われわれに確保されるのである。

6. メルロ・ポンティのマルティネ批判

1959年にマルティネが高等師範で行った講演を、メルロ・ポンティは興味深く聴講し、直ちに自己の「研究ノート」にその批判を書き留めた。これはあくまでも暫定的な私的ノートであったが、彼の急死後、クロデルによって1964年に編集公刊された遺稿集『見えるものと見えないもの』の中に収録されている。そして後述するように、マルティネも、当然、その箇所を読んだものと思われる。そのようないきさつを持つメルロ・ポンティの構造主義言語学批判の一文は、残念な

が十分に整理されていない「走り書き」のようなものであり、誠に難解を極めている。それは次の言葉で始まる——「言語体系を関与性によって、つまり不可欠とも言うべきものによって規定しようというこの(マルティネの)方法:それはまずい(何故なら、その場合には)人々は言語活動がどこを通るのかを見究めるだけになってしまい、パロールの十全な力をわれわれに教えてくれない(からだ)」¹⁾。

この冒頭の箇所は、メルロ・ポンティがマルティネを誤解しているのではないかと、とも思える一節である。何故なら、マルティネは初めから、「パロールをその十全の力において」記述しようなどとは意図していないからである。そもそもマルティネは、自らの研究対象をラングにしぼり、そのラングを、前節で見たように、音声的本性を持ち、かつ二重に分節するところの伝達手段である、と規定している。だから彼は、自己の研究分野から、情報的機能をほとんど持たないものや、有聲の実体に結実しないものを除外している。そして彼は、(メルロ・ポンティが指摘したように)ラングの関与的特性を浮き彫りにし、ラングの機能と構造(体系に属する諸単位間の諸関係の全体)を構成し直すということを、自らの課題とした。

メルロ・ポンティは、更に続けて言う——「もしもパロールが、こうした凝固した諸関係の中にあると考えたとしても、われわれは誤謬を犯すことになる——それは科学者の犯し勝ちな誤りであり、一種の科学主義的誤謬である。そしてそれが誤謬であることは、言語の進化とか言語の歴史を理解することが不能になることによって、判明してくる。それは(歴史を)共時態に還元してしまうからである」²⁾。

メルロ・ポンティのこのような判定は、恐らく、マルティネを大いに驚愕させたことであろう。というのは、マルティネは、若干の著述の中で、その構造的な方法を、通時態へも適用しているからである³⁾。また、マルティネによると、話者の伝達必要性ということが、言語的变化の本質的原理であって、言語の歴史的進化はそこから生ずる、と説かれている。となると、マルティネの立場は、どんな意味で、歴史を理解するのに不十分だと言われるのであろう?

メルロ・ポンティは言う——「科学的態度においては、言語は、あたかも自国語ではないかのように取扱うということが必要であり〈自己移入(Einführung)〉をせずに、カッコに入れておくことが必要である」⁴⁾。

メルロ・ポンティは、科学者の右のような態度を、高

く評価する。それはちょうど、フロイトが精神分析学を創始するに当たって、夢とか意識とかを、全く知らないかのように分析していったあの態度決定と同類である。余りにもなれ親しんでいる母国語を全く知らないかのように、つまり、未知の言語を発見するように、分析する態度こそ必要なのである。「このような態度は深く哲学的であり、それは、反省の態度の最良の部分をなすものである」と、メルロ・ポンティは讃辞を惜しまない。但しこの箇所は、〈そこにはやはり問題があるのだ〉という後半の箇所に引き継がれている。この辺の論理は難解をきわめ、さながら暗号文の解読にも似ている。そこで、一先ず、メルロ・ポンティのマルティネ批判を中断して、つぎに、マルティネの側からのメルロ・ポンティ批判を見てみよう。

1) Le Visible et l'Invisible, p. 235

2) ibid.

3) マルティネはしばしば音韻変化の経済とか進化に言及している。

4) ibid., p. 236

7. マルティネのメルロ・ポンティ批判

メルロ・ポンティの「手記」が発表されてから5年たった1969年の「エクスプレス」誌の3月号に、マルティネはメルロ・ポンティへの若干の反論を試みた。彼は、言語学の現場を、あたかも受難劇のようなものであると言い、メルロ・ポンティこそ「そういう様式を開始した最初の人である」と皮肉っている。マルティネによると「(メルロ・ポンティは)言語学についての厳密な知識を持たなかったが、ソシュールから受けた靈感の力を確信していた。彼は、言語学者が取り組むことを禁じていたような諸問題を、自らに課したのだ。つまり彼は、絶対に、自己の研究分野を限定しておこうとはしなかった。彼は、(言語学者ではなく)哲学者であることを遂行したわけだ」¹⁾。

マルティネは、繰り返し言う——「(科学的な研究を行うとは)初めに諸事実を観察することであり、(科学的であろうとする言語学は)検証可能でないような問題を提起することはない」²⁾。つまり、マルティネは、〈科学が科学である所由は、それが機能と検証の範囲を越えて展開することを禁じるところにある。そしてこのことこそ、知の有効性を保証するものではないか〉と反論して、メルロ・ポンティの姿勢を、暗に非難したわけである。

だが、メルロ・ポンティの所説が、厳密性を掲げる言語学の科学性に、果して抵触するものであるかどうかは、にわかに判定し難い。メルロ・ポンティは、生涯を通じて、科学主義には批判的であったが、科学そのものの推進に、異議を唱えたことはないのである。

1) A. Martinet, L'Express (mars 1969), p. 47

2) ibid., p. 44

8. メルロ・ポンティの模索の方向

ここで、「研究ノート」の中から、メルロ・ポンティの科学に対する両義的な関わり方を示す若干の箇所を拾ってみよう——

「哲学者が求めるものは、個人の経験を越えた根源的・共同的な創設 (Urgemein Stiftung) である……」。

「前理解 (précomprehension) が科学的対象化に先立って居り、対象の存在論の価値を問題にするのも、この〈前理解〉からなのだ……」。

「哲学は、科学以前へ回帰することではなく、むしろ〈超科学 (méta-scientifique)〉に関心を寄せる。そしてこの〈超科学〉は、次のような条件つきで、科学の構成的研究方法によって解明されることさえある：即ちその条件とは、われわれが科学活動を更に活潑化して、それが自らに露呈するところを見てとるということだ……」。

これらの箇所を参照しつつ、メルロ・ポンティが自己に課した課題の方向を要約してみると、凡そ次のようになるであろう——

(1) 経験的諸科学の最前線から、最大のヒントを得るということ。

(2) 次に、それらの諸科学の基礎を吟味し、基礎づけし直すということ。

(3) ここから更に、新しい存在論を構築するということ。

この (1) と (2) とは、多かれ少かれ、他の若干の思想家にも見られる特色であるが、メルロ・ポンティの真価は、(1) と (2) との徹底的な総反省を通じて、(3) を目指したところにある。だが彼は、自己の新しい存在論を完成することなく、たんにその方向性を僅かに指示しただけで、惜しまれつつ急逝してしまった。最晩年のメルロ・ポンティの模索の方向を、辿ってみたいことにしよう。

「遺稿」の中で、メルロ・ポンティは言う——「意味についての新しい哲学は、それが否定として、つまり

規範との関係における隔差として提出されるところにある。かかる哲学は、様々な諸構造の間に亀裂をつくりることがない。知覚される身体と語られる身体との間に、何の亀裂も存在するわけではないが、それは、ただ構造という観点からのみ認められるのである¹⁾。」

だが、構造主義の特色を具えるこの〈意味の哲学〉は、現象学であることを続ける。つまりそれは、文字通り、「現象学的構造主義」なのである。「もしも私のパロールが意味を持つとしたら、それは、そのパロールが、言語学者が明らかにしようとしている体系的組織を提示するからなのではない。そうではなく、その理由は、その組織が、眼差しと同様に、それ自身に依拠するところにある：作動的なパロールは、制度化された光がそこから差ししてくる所の薄明の部分なのである。それはちょうど、身体の漠然とした自己反省が、いわゆる〈自然の光〉であるようなものだ。見る者と見える物との可逆性があり、それら二つの変様が交錯するところに、いわゆる知覚が生れるのと同じように、パロールとそれが表現するものとの間には、可逆性が存在しているのだ。意味(表意作用)とは、話し方の物理的・生理的・言語的手段の多様性を封印して閉鎖し、収集するところのことであり、多様な手段を一つの行為へと集約することである。それはちょうど、視覚が知覚的な身体を完成するものであるのと同様である²⁾。」

要約するなら、たとえ構造が意味(表意作用)の必要条件であるとしても、構造はその十分条件ではないのである。意味は、他の一切の表現との差異として存在しているのだが、それはただ、語る主体の行為によって差異となるのである。つまり、語るという所作の活潑化によって、この差異は初めて実体化してくる、というのである。

1) Merleau-Ponty in Sens et Usage du Terme Structure ed. Mouton, p. 155

2) Le Visible et l'Invisible, p. 202

9. 存在論的言語論の輪郭

繰り返すなら、語るということは、単なる伝達作用ではない。また、あらかじめ出来上っている思考を、単に表現するといったものでもない。更に、語るということは、大方は音声的所作であろうが、この音声も必ずしも必須条件とは思えない。(J. デリダの音声中心主義批判参照) 語るとは、主体が世界の中でとる「位置のとり方」であり、「経験の構造化」——「知覚野の

構造化」——「人間関係の設立」……なのである。しかも、それは、単に知的伝達ではなく、情動的・所作的なものを含める総合的意味の設立である。いな、実は、このような記述自体も、誤解を招き易い。即ち、決して、「主体」や「世界」が先にあって、「語る」ことを通じて、主体の位置のとり方や構造が成立してくる、ということではない。その「主体」や「世界」も、(精神も経験も……)「語る」ことと同時に成立してくる。例えば、私(I・je・ich……)という語の言語的实践なくして主体(主観)の成立があるわけではなく、(アヴェロンの野生児を見よ)名づけることなしに認識が進むわけではない。(幼児や未開人を見よ)同様に、言語的・所作的実践から離れて、客観世界が成立している^{と見なす}のは、科学主義の誤謬と言う外はない。

要するに、言語によって、人と人、人と世界との関係が成立する。はじめ、漠然とした関係が生じ、周囲空間、人間空間が生じ始め、世界が成立してくる。こう考えてくると、言語の機能が伝達であるという立場が一面的であることが分る。言語の最大の機能は、混沌が秩序化され、現象が実体化するという点にあるのである。言葉を発することによって、何かが生れる。それは、新生であり、創造である。それは、単なる自己表出なのではない。何となれば、表出されるべき何事かが先にあったわけではないからである。「私」が「コップ」で「水」を「飲む」——という語彙連鎖は、その項(単語)が先に存在していて、それらの関係が後から生じ、意味が生じて、文が成立する——というわけではない。先ず、〈コップに水を注いでもらって私が水を飲む〉といった不可分の原初的行為(原ディスクール)が先行し、そこから抽象されて、「私」「コップ」「水」「飲む」……という収斂がなされると考えざるを得ない。(幼児の言語獲得過程を見よ¹⁾)従って、それらの言葉は、単なる手段(道具)なのではなく、目的、つまり人間的欲望の充足と人間空間の関係の設立を目ざして協業している。だから、どの語も、ディスクールという場の中で初めて成立し、構造主義の言う「構造」と、それを支える「人間関係の総体」の設立を目ざして働くのである。構造主義を含め、記号学的言語論における音素^{フォネム}や記号素^{セメーオン}への還元は、科学主義的モデル(原子論的還元主義)であって、そこでは、言葉の持つ人間的意味の何かが捨象されてしまう。むしろ、人間にとっての意味のある「最小の単位」とは、ディスクールというゲシュタルトであるとする方が勝っている。

敢えて誤解を恐れずに、一つの比喻を使って説明す

るなら、マルティネをはじめとする構造主義言語学者が、言語という名の下に理解しようとしたのは、言語のいわば見える部分=検証可能な部分=〈言語という樹〉の地上の部分であった。これに対し、メルロ・ポンティやハイデガーが追求しようとしたのは、その言語のいわば見えない部分=狭い意味での検証や実証を超えている部分=樹木の地下に根の部分なのである。マルティネとメルロ・ポンティの相互批判が、しばしばすれ違ったのは、むしろ当然のことであるとさえ思われる。ちょうど人間の心といっても、意識を中心にして見ていくか無意識を中心として見ていくかで、大きな差を生み出すのと同じように、同じ言語といっても、それぞれ射程に収めようとする次元が異なっているのである。

先にふれておいたように、構造主義者の言語の原モデルは、原始的・動物的な「叫び」であった。それは、動物行動学に根拠をおき、「獲物がいる!」とか「敵が来た!」とかいった類のものである。だが、この説を認めるにしても、これらの叫び声の根底には、たんなる伝達をこえた何かがある。それは本稿の2.で示唆しておいたコミュニケーション(共生・共同関係)ということである。狭義のコミュニケーションの土台は、必ずこの広義のコミュニケーションなのである。(その逆は成立しない!)いま、伝達を主軸とする言語を、④「必要言語」と呼ぶとすると、これに対立する言語の様相はどのようなものであろうか。それは⑤「快楽言語」と呼んでよいであろう。④は、「理性人」・「労働人」の系譜に通じ、⑤は「遊戯人」の系譜に通じる。では、⑥の原モデルはどのようなものであろうか。それは「いない、いない、パー」のようなものとなろう²⁾。この原初的な語りかけは、「实在モデル」からは程遠いために忘却され勝ちであるが、実は、人類に普遍的なものであり、それとして幼児の遊戯となっていない場合でも、他の一切の語りかけの根底に何がしかは含まれるのである。だが、④とか⑤とかいう区分そのものが近代的抽象の産物であって、言語の根源相は、④と⑤との原初的統合⑥でなければならない。そして根源の論理を目ざす「存在論的言語論」は⑥をその射程に収めようとする。それは、言語——人間——世界……の同時成立を示す立場であり、同時に、〈言語のロゴス〉と〈思考のロゴス〉と〈存在のロゴス〉の通底性ということ、つまりそれらは一つのロゴスの多様な展開であるという立場である。但し、これらのことについては、何れ、稿を改めて論じることにした。

- 1) D. マクニール『ことばの獲得』参照
これは日本の「いない, いない, バー」と大差ない。
- 2) 欧米では “Fört, (fört) et Dä” のように言うが, こ